市立函館博物館
友の会々報　No.68

函館西部地区の段丘と街の形成

会員　茂木　治

はじめに

函館西部地区の街の構成には特徴があり、それが街の観光にもつながっている。

これは青函連絡船が運行していた頃には連絡船の出入港時にだれでも感じたもので、港と市街地、その上に並ぶ教会や寺院、旧公会堂のすがたである。それは函館の雰囲気を代表するものとして格好の被写体となり、観光ポスターにも何度も登場している。

このような街の形はどのようにして形成されたものか、西部地区に多い石垣を通して考えてみる。

Ⅰ　函館に本州からの人々が住み着くまで

1　函館西部地区（函館山山麓）の石垣や擁壁と崖

(1) 連なり（同一面）と見られる崖

（標高は国土地理院『１万分の１地形図函館』）

函館の西部地区の函館山山麓には石垣や擁壁が各所にみられる。その中には以前は同一の崖であった所を被ったとみられる場所も多く見られ、その連なりをまとめると以下のようになる。

① A崖の連なり　（標高10m付近）

～まちづくりセンター裏～五島軒本店～郷土資料館裏～元町観光駐車場～中華会館裏～元町ホテル裏～

・一番下の連なりの石垣で、港や電車通からすぐ見える。新しい海成段丘と思われる。

② B崖の連なり　（標高20m付近）

～竹田病院港側～旧イギリス領事館山側～ペリー広場山側～弥生小学校山側～

③ C崖の連なり　（標高30m付近）

東本願寺山側～カトリック元町教会山側～西高港側～元町公園山側～道住愛宕団地山側～

・函館ロープウェイ駐車場の石垣は南部陣屋ではなく、函館裁判所建設時の積み上げと思われる。

④ D崖の連なり　（標高50m付近）

～ロープウェイ山麓駅～観光駐車場山側（元町配水池港側）～ハリストス正教会山側～船魂神社下～

令和３年３月30日（火）、函館中央図書館大研修室において、平成２年度の会員発表会を実施致しました。発表者は茂木治会員で「箱館西部地区の段級と町の形成」と題して行いました。当日は20名の会員・会友の方々が参加致しました。

茂木会員の発表に付きましては、昨令和２年３月に同じ内容で発表する予定になっていましたが、コロナ禍の影響で、延期になっていたものです。本年になって再度準備し、実施にこぎつけたものです。茂木さんはじめ、関係者の方々のご労苦に敬意を表します。

講演をする茂木会員

(2) 函館西部地区の海成段丘(大淵玄一説)

函館の西部地区の海成段丘は、氷河期である更新世(約164万年~1万年前)に形成されたが、その期のいつにあてはまるのか、また構成についても諸説あって見解は一致していない。段丘は函館山対岸亀田山地側に見られる日吉町段丘A面，B－1面，B－2面などと一致するが、亀田山地側は隆起量が多いため高度は各面ともそれぞれ20mほど高くなる。

西部地区現状の石垣の連なりを、大淵玄一の海成段丘の分類にあてはめてみる(『函館の自然地理(平成8)』、『函館の地史(平成13)』)と下記の表のようになる。ただし、大淵は現状の段丘崖は幅が狭く傾斜がきつい上に、土砂流れ落ちや道路の造成、家屋建設による地表面の変化により、標高だけで段丘面を判別するのは難しいとしている。

・現状の石垣や崖と大淵玄一説との対照

A　崖－末広面(日吉町段丘B-2面)　標高20～10m
B　崖－弥生面(日吉町段丘B-1面)　標高30～20m
C　崖－元町面(日吉町段丘A面)　標高40～30m
D　崖－(標高50m付近　大淵説に対照面なし)
未確認－常磐面(赤川段丘－鈴蘭面)　標高80～70m

2 亀田川の変化(大淵玄一説)

亀田川の流れ－・幾度となく河道を変え扇状地を形成
・徐々に北西から南東方向へ変える
(地盤が北西に高く南東に低い)

5万年前－本通→深堀→湯川→松倉川と合流→海峡

銭亀沢火山の噴火と以後の亀田川の流れ

銭亀沢火山(汐泊川河口沖約2.5km水深50m)
4万5000～3万3000年前噴火(諸説あり未確定)
・おびただしい量の火砕流噴出
(火砕物は函館市街地の下を厚く被っている)
・火山灰は日高方面まで飛散
→亀田川河道変化－火砕流堆積物が河口域閉鎖
→川原町～五稜郭町～大川町～函館湾
→亀田川扇状地と松柏台を分離

その後－扇状地上部からの大量の砂礫が洪水を発生
→砂礫は洪水の度に神山北方の河原に堆積
→川は西へ押され以前の河道の一つに移動
＝海退後も流れを変えず、古亀田川(願乗川や新川以前の亀田川)となる。
(神山北方の陣川と亀田川の離流点付近の地形に当時の状況が残る)

古亀田川のすがた

河道　氷期終了の1万年前の完新世から扇状地の河道は変化せず、海退後も火砕流堆積物を残して6m程扇状地面を掘下げ流れる。川幅は推測では当時8m前後、広い蛇行部分は約120m程で、約2～3mの自然堤防と河岸段丘を部分的につくる。

自然堤防　川筋に高さ約2～3mの自然堤防があり堤防上は道路・畑・居住地として利用。

宮前橋～亀田八幡宮～万代郵便局＝湯川道

3 函館付近の地形の変遷

(大淵玄一説。但し時代区分と遺跡名を除く)

(1) 旧石器期後期(ヴュルム氷期－7万～1万年前)
・1万～8000年±3000年頃－氷期最盛期)
海水面は現在の140～100m下位

(2) 縄文期(新石器時代にあたる)

草創期(紀元前1万3000～9000年)

早期(紀元前約9000～5000年
垣ノ島遺跡=9000~6000　住吉町遺跡)
・1万～8000年前頃－最終氷期終了　気温上昇
海面上昇、現海面下50~40mから現海面高度に

前期(紀元前約5000～3000年
函館空港遺跡第4地点　サイベ沢遺跡)
・8000～5500年前－縄文海進期
温暖期の最盛期(以後これを上回る温暖期はない)
平均気温－函館は関東・東海地方並み
7・8月25~26℃　1・2月3.5℃
海水温－現在より夏3～4℃、冬4～5℃高い
海水面－最進時は現在より3～5m高い
現在の等高線18m付近が海岸線
函館湾海岸や海峡側に砂州
水没地域－・松倉川河口～本通～深堀一帯
・川原～五稜郭町
・海岸や河口に砂州形成
高地孤立－函館山、松柏台(松陰町・柏野町)
縄文遺跡－内海海岸付近に多数の遺跡
海路や陸路で交易
・5000年前頃から－気候は寒冷湿潤化
→岩石風化、河川に大量流入
→溺れ谷・内海の埋積－湿原へ
・4500～4000年前－海面低下と土砂の供給量増加
→海岸砂州から砂丘が発達

函館西部地区
主な高石垣・擁壁・崖
A崖
B崖
C崖
D崖
入舟町
船見町
弁天町
大町
末広町

中期(紀元前約3000～2000年　大船遺跡)
後期(紀元前約2000～1000年　鷲ノ木遺跡 日吉遺跡)
・3500年前頃(紀元前1500年頃)から－寒冷化すすむ
晩期(紀元前約1000～300年)
・2500年前頃(紀元前500年頃)から－寒冷
(過去１万年で最も厳寒)

(3) 続縄文期(紀元前約300～紀元後700年)
・1800年前頃(紀元200年頃)まで
－海面は現在より２～2.5m程低い
→岩石の風化が進み扇状地の砂礫が大量に流出
亀田川－扇状地や松柏台の溺れ谷を埋積
中流域右岸に高さ３mの礫段丘
段丘の川－本通深堀五稜郭埋積－広い湿地
・４世紀(300年)半以降－海面２～３m上昇
→現海水準を多少上回る
函館湾流沿岸の浜堤列砂州－亀田川砂礫
海峡側堆積砂州－汐泊川、松倉川砂礫
⇒二つの砂州が結合⇒函館山陸繋島形成
Y字形低湿地(海跡沼)－標高５m以下
＝新川町中心、大縄町~松川町~堀川町
＊願乗寺川－砂州の間の低湿地を掘る
＊函館市街地は若い軟弱な地盤の上
＝粘土層の上に砂層がテンプラの皮
→地震による液状化の危険

(4) 擦文期(７～13世紀　奈良・平安期)
平安海進
＊鎌倉期は寒冷

4 本州の人々 箱館へ ~箱館の人々の動き~

(1) 本州の人々の住み着き　９世紀
箱館山と陸繋島が静かな海面を造る－網知らずの湊
A段丘の下に人が暮らす。停泊しやすいが水が不便
→本州人が平安延暦年間(782~805)以降住み着く
＊ 貞治の板碑－貞治６年(1367 北朝年号) ２月

(2) 館を中心とした箱館の発展　14世紀末～16世紀
A崖段丘上－館築造←南部氏と安東氏の対立
志海苔館－小林氏館(小林良景・良定)
15世紀初頭(14世紀後半?)築造
＊鍛冶屋村には百棟程の屋敷
＊志海苔古銭－博物館に37万枚収蔵
長禄元年(康3 1457)陥落、後復活
永正９年(1512)陥落、以後空堡
宇須岸館－河野氏館(河野政通・季通)
文安２年(1445。康3-1454年とも)築造
東西三五間(70m)南北二八間(55m)
長禄元年(康3-1457)陥落、後復活
永正９年(1512)陥落、以後空堡
箱館－湊として船が停泊しやすく、館により安全
→15世紀宇須岸全盛期は年三回若狭から商船
宇須岸の問屋家々は渚汀に掛造りに造作、
船は縁の下の柱に纜(ともづな)を結び繋ぐ
神社創設－室町(1392~1573)中期頃
・観音社-伝説では保延元年(1135)創建
・弁天社-創建年不明
・八幡社-河野館鎮守
・愛宕社-宇須岸鎮守として河野館に

(3) 箱館から亀田へ－松前氏の台頭　17世紀
箱館－衰退→宇須岸館陥落、福山蠣崎氏に勢力集中
箱館山の樹木伐採→土砂崩れ増加
飲料水が不便
亀田－発展→亀田川の水、亀田川河口の湊の利用
亀田川河岸段丘や自然堤防上に集落
－周辺に農業を行える広い土地
海産物の下海岸と福山を結ぶ陸路の要
＊亀田川河口が舟入間で二百余軒の集落
－箱館は館跡と空屋十軒。松前五百軒
上ノ国百五十軒、福島百二十軒
(寛文9-1669年シャクシャインの蜂起の頃-『津軽一統志』)
慶長18年(1613)　松前藩、亀田番所を設置(亀田八幡村近)

(4) 亀田から箱館へ－松前藩の箱館　18世紀
亀田－船舶が増え、亀田川河口の湊が手狭となる
流入土砂の堆積で湊が遠浅となり碇泊に不便
元文年間(1736~41)　亀田村の吉村何某は条件が有利な箱館に荷物取扱の出店を設ける
－箱館問屋の元祖
箱館－生活には不便だが、広い湊が利用できる
→亀田から人が移り箱館が発展
元禄15・16年(1702・03)　亀田川洪水
→寺の箱館移転－寺を維持できる檀家数
・高龍寺-宝永３年(1706)亀田から
・称名寺-宝永５年(1708)亀田から
・浄玄寺-宝永６年(1709。06とも)亀田から
寛保元年(1741)　亀田番所が宇須岸館跡移転

Ⅱ 絵図からみた箱館の街の広がり

1 1800年以前の箱館の街
～『分間箱館全図(寛政-1810)』から考える～

松前藩の亀田番所は慶長18年(1613)に亀田におかれた後、寛保元年(1741)に箱館宇須岸館跡に移った。

当時の箱館の街の様子は、A崖の海成段丘の上部山手と崖下の海手とでは大きく違っていた。

段丘下の海手西端には住民が居住し漁業中心の集落がつくられていた。人々は地形に合わせて各自勝手に住居を構え、2～3間幅の狭く曲がりくねった道が広がっていた。湊を利用した生活は便利であったが、飲料水には苦労して亀田からも運ばれたと思われる。

短く急な坂道を上がった段丘の上は、海手とは異なる雰囲気であった。箱館山裾に広がる曠野には野道がうねうねと続き、山は長年の伐採から大きな木はほとんどなく、崩落も起きていた。その中に亀田番所やその役宅、寺社が建ち、また寺社の参詣者や箱館山の観音巡りをする人々を相手とする茶店から山之上町ができ、山の麓にかけては広い直線道路の山之上新地、神明裏新地、常磐町新地などと呼ばれる新しい町が東西へ広がりつつあった。

2 前幕府直轄初期(享和初年-18011~1803頃)の箱館

(1) 1800年代始め頃の箱館
～『分間箱館全図(寛政-1801「享和図」と表記)』から～

寛政11年(1799)から前幕領期に入ると松前藩の亀田番所に代わり段丘中央に幕府の御役所が置かれた。当時の東西町外れには蝦夷地警衛のため出張した弘前藩(津軽藩)と盛岡藩(南部藩)の元(本)陣屋が建てられ、湊では幕府による築島埋立や御船作事場設立などの大土木工事もすすめられた。さらに幕府と結び付いた高田屋などの商人たちが商売を広げ、船の出入りも増加した。

山手段丘西部には町屋が増えたが、まだ曠野が広がる中央部や東部は御役所や役宅、陣屋、寺社の地だった。これら広い敷地の建物がこの地に集まったのは、広い土地は段丘上にしかないことが理由であろう。これらの施設と段丘下の住民が共に通いやすい山之上町には茶屋に加えて、芝居小屋、小宿等が店を出した。

(享和元-1801年の箱館=9町、戸数586、人口2595人
文化11-1814年 戸数801、人口3457人『市史年表』)

(2) 「享和図」に示された街

段丘の上

松前藩元亀田御番所地－松前藩は慶長18年(1613)亀田に亀田番所を置き、寛保元年(1741)亀田番所の名称はそのままに館の形が残っていたという宇須岸館跡に移した。この番所の位置は嘉永5年(1852)の地図に「元御番所」として松前藩の亀田番所に入った幕府の御役所と思われる場所が画かれている。ただし番所地前の土塁の切れ込み場所から、御番所はもっと西の区域にあったようにも思われる。

なお、亀田番所が入った宇須岸館についてよく見られる『函館沿革誌』からの想像図は亀田番所地をもとに画いたもので広さが記録と合わないので疑問がある。

幕府御役所新築地－寛政11年(1799)幕府は東蝦夷地を直轄、蝦夷地取締御用掛を置き亀田の旧松前藩亀田番所を修理し仮庁舎とした。享和2年(1802)2月に御用掛を蝦夷地奉行としさらに同年5月に箱館奉行とした。享和3年(1803)春に亀田御役所(御番所)を箱館の新敷地に新築して箱館奉行御役所として移転した。

総構地　三千三十余坪
御役所　建坪六百三十余坪
役　宅　元松前藩亀田番所の西半分を取り込む
外　陣　番所地東隣の八幡社地を取り込む

奉行交代屋敷地－文化元年(1804)亀田の旧御役所庁舎を取り壊しその古材でこの地に交代屋敷を建てたが文化3年(1806)の大火(青山火事)で焼失した。

津軽勤番所－前期弘前藩陣屋である。寛政11年(1799)幕府は東蝦夷地を直轄、弘前藩に東蝦夷地警備を命じ、弘前藩は元陣屋を箱館に置いた。この陣屋は享和期(1801)には「津軽勤番所」文化期(1804~17)には「津軽家勤番屋舗」と書かれており、陣屋とは呼ばれなかったと思われる。津軽勤番所地の面積は約五千三百坪で、幕府箱館御役所総構地の三千三十余坪より広かった。

南部勤番屋敷－寛政11年(1799)弘前藩と同様に東蝦夷地警備を命じられた盛岡藩が寛政12年(1800)に箱館に置いた元(本)陣屋地で「凡そ七十間(約127m)四方地積四千九百歩」であった。その後手狭のため拡張された。後幕領期も大体同じ土地により広大な水元陣屋を建てた。

観音社－創建には各説あるが江戸期の記録に応永元年(1394)の鍔口があるとあるので、弁天社と同じ室町時代中期の創設と考えられる。旧地は現在地より西にあった観音堂で、元文４年(1739)には船魂神社とされているが、一般には明治の廃仏毀釈まで観音堂と呼ばれていた。幕末の記録では本尊は十一面観音で船魂大明神本地観世音菩薩石像があったとある。

愛宕社－文安２年(1445)河野政通が館を築いたとき、宇須岸の鎮守として館の後方に安置したという。初め無火神社と言ったが江戸期に京都の火神である愛宕大権現を真似て愛宕山と呼ぶようになった。

八幡社－享徳３年(1454 文安2-1445年とも)宇須岸館を築いたとき亀田八幡社から分霊し館の鎮守として祀ったと伝えられるが、18世紀初め(宝永７－1710～正徳元－1711年とも)に松前藩の意向で創建されたともいう。長く松前藩亀田番所地の東にあったが、御役所地拡張の御召上げで文化３年(1806)現八幡坂の地に遷宮した。

神明社－天和年間(1681~1683)松前藩により西の神明社東の八幡社として建立されたといわれるが、創建移転には諸説ある。弘化２年(1845)頃は樹木陰森して神寂たる所であった。

浄玄寺－元禄３年(1690)泉沢に阿弥陀堂として創建され、宝永７年(1710)泉沢から河野館の跡地に移り、延享４年(1747)隣地の富岡町へ移転し浄玄寺と称した、とされるが創建移転には諸説ある。なお、寛保元年(1741)には亀田番所が亀田から宇須岸館に移っていて、延享４年(1747)移転も疑問がある。

稱名寺－正保元年(1644)亀田に阿弥陀庵として創建、明暦元年(1655)阿弥陀堂と改称、元禄３年(1690)称名寺を公称した。宝永３年(1706)箱館に寺地を決定して、宝永５年(1708)に箱館富岡町へ移転「寺中方五十間、本堂、庫裏、三十三体観音堂、経蔵、鐘楼門」を建立した、とあるが、移転には別説もある。

實行寺－元禄12年(1699)に福山法華寺の願いにより亀田箱館村に法華寺支配実行院の庵地が与えられ、正徳４年(1714)京都本満寺から寺号を許可され富岡町称名寺の隣に移転、実行寺と公称したとされるが、創建移転には諸説ある。

七面山－実行寺裏の丘で、身延山久遠寺の奥に寺守護の七面明神が祀られ七面山と呼ばれたのをまねた。見事な堂舎の七面宮を建てたという。

山之上町－三寺や亀田番所の移転後に箱館山の三十三観音巡りや寺社参りの人出や遊楽客をねらって実行寺隣地に開かれた茶屋などの集まりは繁盛して山之上町と呼ばれるようになった。享和３年(1803)、茶屋渡世の株仲間の願出が認められて公認の料理茶屋(茶屋商売)となった。茶屋営業者は年期奉公にかかえた娘たちを茶酌女と呼ぶ売女や女芸者に仕立てて遊女屋同様の所業をさせ、住民や旅人らの客を集めた。

段丘の下

辨天社－観音社と同じく、蝦夷地の商品流通の拠点として松前とともに箱館が共栄していた室町時代中期に弁天町に創設された函館で最も古い宗教施設のひとつと言う。毎年漁期に亀田八幡宮の神職が出張していたが、やがてこの地に永住するようになり社のある屋敷が建てられた。宝永６年(1708)に社を造替えの記録があり、享和元年(1801)には弁天町北西角に島を築出して橋を架け社殿を移した。

高龍寺－福山の法源寺末として寛永10年(1633)に亀田に創建された。元禄16年(1703)豪雨による亀田川大洪水により塔頭が倒壊するなど水害の被害が多く、宝永３年(1706)箱館大黒町に替地を得て移転した(元禄13-1700年移転とも)。「境内敷地二千七百余坪、樹木繁り泉声あり付近一帯は狐狸棲息す」と記録にある。

御蔵－「享和図」には幕府の御蔵が３か所見られる。そのうちの亀田番所地の下にある蔵は一般に義倉と言われている米蔵で、東の御蔵は後に高田屋の大倉屋敷と呼ばれたものと同じと思われる。幕府の義倉を兼ねた(？)蔵を高田屋が管理したのであろうか。

地蔵堂－三大地蔵堂のひとつで地蔵町の名の起こりとなった。寛政７年(1795)高龍寺持ちの鼻欠け地蔵の石地蔵堂として本堂と庫裏、切戸門が建立された。

堀割－横堀。享和元年(1801)、幕府計画の蔵地への荷役のため海汀から七十間(127m)掘り、栄国橋と恵比須橋を架けた。

土出し堤－埋立計画の寄州新築地工事の通路として、横堀を掘った土を使って海汀から沖へ向け幅数間、長さ百二十間(218m)の堤を築いた。「享和図」では堤から地蔵町まで広い埋立地が図示されているが、この計画に近い形でこの地の埋め立てが終了したのは明治期になってからである。

「箱館から函館へ」享和元年図」による
享和初年（1801～1803年頃）の箱館
「箱館から函館へ」（函館市）の「享和元年（1801）図」を
下記参考文献をもとに一部修復致しました。
分図作成全図 写真
文化区 東南地区修正箇所之図
南部地区修正箇所図 及び 付図 山王坂地区図 函館市
箱館の史跡 函館市 市長 明石 昭和11 函館市教育委員会
（石碑表示の記録（写真）） 写真 函館
七面山
愛宕社
幕府御箱館役所新築地
松前藩元亀田御番所地
明名寺
浄玄寺
實行寺
観音社
八幡社
南部勤番屋敷
堀割
土出し堤
地蔵堂
御蔵
奉行交代屋敷地
高龍寺
山之上町
神明社
津軽勤番所
弁天社
入船町
船見町
大町
大手
注 当時の町は道路に沿う両側が同一町であった。
従って、町名は道路に沿っての位置であるが、
図では町名を道路に接せると道路が不明となるため、道路の線に記した。
縮尺 1／4000
原図（明治-1903） 富田 章
作図 尾木 浩
平成25-2013.11

3 前幕領期末（文政初年-1818~20年頃）の箱館

(1) 1820年頃の箱館

～『箱館市中細絵図（製作年不明文政期「文政図」と表記）』から～

箱館は享和期からの前幕領期20年の間に居住地域が東の桝形まで広がり、御役所周辺には関連施設や役宅など官の施設が集められた。山之上町の茶屋は盛んとなり常磐町にも広がって、山之上茶屋、常磐町茶屋と呼ばれ、人々が集まった。

このように、段丘上には、官地、社寺地、陣屋地、さらに茶屋地などが広がり、海手の高田屋嘉兵衛、金兵衛兄弟などの商人が活躍し庶民が生活する地域とは様子が違ったが、ともに箱館の活発な活動を示す場となっていた。

このような箱館の姿は、政治経済の中心が松前へと移った文政４年(1821)の松前藩復領後もそのまま続いた。なかでも幕政期に力を伸ばした高田屋の勢いは衰えず、箱館の経済に大きな影響を及ぼしていた。しかし、松前藩と松前商人の策謀により天保４年(1833)に高田屋が闕所となると、松前(近江)商人が藩の力を背景に勢力を伸ばしたため箱館の経済力は一時衰えた。

（文政元-1818年 戸数853、人口3968（男1958 女2010）『市史年表』）

(2) 「文政図」に示された街

段丘の上

御役所屋舗－文化４年(1807)幕府は全蝦夷地直轄し松前奉行が任命されて政庁は福山に置かれた。箱館は吟味役が置かれて箱館役所となった。

文化７年(1810)箱館役所の庁舎建替で棟上げが行われた。この建物がその後明治26年(1893)まで83年間使われた建物である。

文政４年(1821)に松前藩が復領すると、松前藩の箱館奉行所となった。

安政元年(1854)に幕府の箱館御役所が再設置され翌安政２年(1855)には松前藩領地を除く東西蝦夷地が幕府再直轄となった。安政３年(1856)箱館が開港すると庁舎の建っている場所などが問題となり、元治元年(1864)御役所は五稜郭へ移転、この建物は箱館取締りの役所となった。明治元年(1868)の徳川脱藩家臣団による統治でもそのまま箱館奉行所であったが、箱館戦争後、五稜郭の庁舎を使用しない新政府は箱館府の政庁をこの建物に戻した。

役宅－箱館御役所の役宅地は御役所周辺にあった。そのうち元亀田番所地の役宅は現観光バス駐車場から海側の比較的なだらかな面に建っていた。現ペリー広場となっている山側上部は傾斜がきついため亀田番所でも同じように空き地であったと思われる。

南部陣屋－当初の南部元陣屋は手狭であるとして、文化３年(1806)に西南に拡張され、一万八百九十余坪となった。

山之上町茶屋－料理茶屋は増えて、文政元年(1818)には築島へも出店した。安政５年(1858)売女渡世が許可され板塀と大門を構えた吉原風の遊廓となった。また異人休息所を置くことが申し渡された。翌年引手茶屋も許され箱館新郭、山之上遊廓と呼ばれた。明治４年(1871)切見世火事で壊滅状態となり、開拓使が実施した遊廓の整理移転により多くの店が蓬莱町に移って蓬莱町遊廓をつくった。

段丘の下

臺場(辨天岬臺場)－文化文政期(1804~20)松前藩は弁天岬に大砲２門の小規模な台場を築造した。

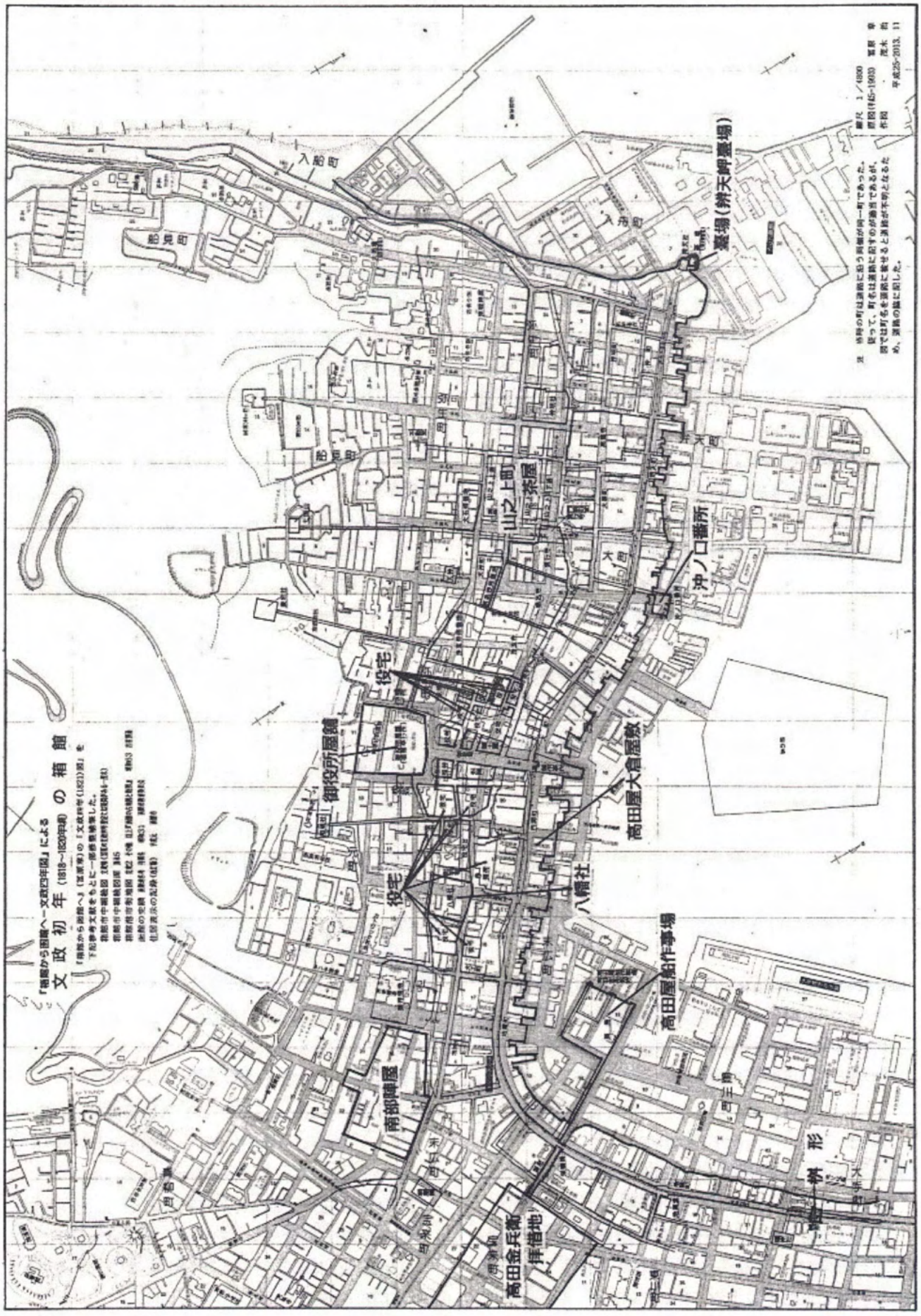
沖ノ口番所－寛政11年(1799)幕府が箱館出入りの船舶や積荷の検査と課税、旅人の取り調べを行った。文政２年(1819)所轄が復領前の松前藩に移った。

高田屋船作事場－享和３年(1803)工楽松右衛門が埋立に着手、文化元年(1804)竣工の埋立地に船作事場官倉を設け高田屋嘉兵衛に運営させた。この時嘉兵衛は許しを得て隣接地の埋立てを行った。この埋立地は、築島、松右衛門の島、高田屋の島と呼ばれた。文政５年(1822)、高田屋金兵衛が後を継いだ。

・**高田屋大倉屋敷**－幕府御蔵地で高田屋全盛の頃に、現ウイニングホールビルから旧桟橋にかけ高田屋の土蔵が14あり、高田屋の大倉屋敷と呼ばれた。

高田金兵衛拝借地－享和元年(1801)、幕府の定雇船頭であった高田屋金兵衛が嘉兵衛の代行として五万坪の湿地を拝借し、埋立てを行って米蔵数棟を建てて凶作に備え、高田屋御殿や高田屋の御本陣と呼ばれる堀割に繋がった堀と庭をもつ豪華別宅を建てたが闕所で建物は壊され、堀と土居と庭だけが残った。

桝形－寛政11年(1799)箱館に出入りする旅人を検問する関所として設置され、方形の土塁に木柵を巡らせ番所で検問した。その後市中手狭になったため、安政５年(1858)取り壊された。


「箱館から函館へ」文政四年図による
文政初年(1818～1820年頃)の箱館
入船町
船見町
遊廓
弁天町
入舟町
遊廓(弁天岬遊廓)
山之上町
茶屋
沖ノ口番所
高田屋大倉屋敷
御役所屋敷
役宅
役宅
八幡社
高田屋船作事場
南部陣屋
高田金兵衛
(伊達地)
形
大手
町
縮尺 1／4800
原図(明治26～1903) 筆耕 中
作図 平成25～2013. 11

4 開港後(明治8~10年頃-1875~1877)の函館

(1) 明治初年の函館

～『開拓使函館第14・15・16大区(明治9年頃)』から～

文政期から50年後の明治8～10年(1875~77)頃の函館西部地区である。翌明治11・12年(1878・79)には大火があり、街区は大きく変わっている。

この50年の間に高田屋闕所、松前藩支配と幕府再直轄、開港と外国人と外国文化の流入、弁天岬御台場築造、御役所亀田移転、亀田川河口の湊と国際的な新しい箱館(亀田)づくりの挫折、箱館戦争、開拓使の政治など、世の中の変化は目まぐるしかった。

函館は人口が増加し陸繋部や山手に居住地が広がった。港も慶応から明治にかけての整備や埋立により家が直接海に接することはなくなった。町並みも従来の焼けたら建て直せばよいとする板張り石置き屋根の家から土蔵造りの耐火建築が建てられ、商売への考え方が変化したこともうかがうことができる。

函館は開港地であり本州との行き来の港町で、人々が集まり、官庁、寺社、教会、商店、工場、造船所、学校、遊廓など、多くの職種や様々な様式の建物が入り交じる港町・商業地の函館としての特色が表れていた。以前からの生活のなかに洋風の生活が加わり、従来の住民と外国人が一緒に住む雑多な時代で、特に段丘上にその様子が加わわったものの、段丘上下の特色はまだはっきり残っていた。古い箱館と新しい函館がともに見られた時代である。

(明治2-1869年 戸数3,536 人口15,030
明治10-1877年 戸数6,508 人口28,344-男14,161、女14,183)

(2) 「明治図」に示された街(明治10年頃まで)

段丘の上

開拓使函館支庁－明治10年頃までに箱館府裁判所(明治2-1869)→箱館県(明治2-1869)→箱館府(県)裁判所(明治2-1869)→函館開拓使出張所(明治2-1869)→函館出張開拓使庁(明治4-1871)→開拓使函館支庁(明治5-1872~明治15-1882)と変遷した。現在も残る旧開拓使函館支庁書籍庫の建設は明治13年(1880)である。

官邸－開拓使の官邸(官宅)は、御役所期の役宅地と以前の会津藩や庄内藩の留守居屋敷地に建てられた。官宅は御役所期の一戸建役宅や明治5～7年(1872~74)に新築した洋風の一戸建から一棟六戸の棟長屋で、棟ごとに土居が取り巻いていた。

函館裁判所－函館裁判所(詳)は明治7年(1874)開拓使箱函館支庁内に設置、翌明治8年(1875)にこの地に新築され、翌年函館地方裁判所と改称した。現在この地見られる石垣は南部陣屋の石垣との説もあるが裁判所のために新たに積まれたものと考えられる。

函館病院－箱館病院は安政5年(1858)ロシア領事館が付属海軍病院(ロシア病院)を建てる話に対抗して、文久元年(1861)山之上遊廓の娼妓の黴毒治療と貧民の施薬治療の名目で山之上町に建てた箱館医学所兼病院が始まりである。その後焼失したロシア病院再興の噂が立ち、それにも対抗して明治4年(1871)愛宕町に新築移転したのがこの病院である。

叶同館－文久2年(1862)イギリス商人シロタの家として建てられ、明治4年(1871)開拓使が外国人の接待所として購入した。後に協同館と改称された。

英国係扱所(仮イギリス領事館)－イギリス領事館は安政6年(1859)称名寺で業務を開始、文久3年(1863)に領事館を新築したが慶応元年(1865)焼失した。その後英国係扱所を建てたが、これも明治12年(1879)の大火で焼失した。

会所学校－明治8年(1875)開校。北海道初の官立普通小学校である。

松蔭学校－明治9年(1876)開校。北海道初の公立小学校(住民が資金を出し設立する学校)である。

神明社－神明社は明治7年(1874)に所在地の山之上町に因み山上大神宮と改称した。

地蔵堂－三大地蔵堂のひとつで茶毘地の山背泊地蔵堂である。文化年間(1804~07)に現在地の使用が許可されている。

招魂社－箱館戦争時の新政府軍戦死者の招魂場として明治2年(1869)8月竣工、9月5日招魂祭が行われた。明治7年(1874)招魂社と改称した。

・**官修墳墓**－当初の官修墳墓地は、招魂社横の道路山側に、松前藩、鹿児島藩、山口藩、弘前藩、大野藩と藩ごとに墓域があった。

魯國司祭館－安政6年(1859)ロシア領事館付附属聖堂ハリストスの復活と名付けられ、明治元年(1868)ハリストス正教会として領事館から独立した。

・**ロシア領事館**－安政5年(1858)実行寺で執務を始め万延元年(1860)領事館を新築した。慶応元・2年(1865・66)に被災して移転を繰り返し、明治5年(1872)一時廃止された。

仏國教堂－安政６年(1859)メルメ=デ=カションが小聖堂を建てたが、カション離箱後に人手に渡った。明治元年(1868)ムニクーとアランバスターが現在地を借り受けて建てた仮聖堂(フランス館)は明治40年の大火まで残っていた。明治８年(1875)マランが現在地に木造で聖堂を建てた。

外国墓－

・**キリスト教外国人墓地**－プロテスタント墓地と呼ばれるがカトリック教徒も埋葬されていると思われるので、こう呼ぶ方がよい。安政元年(1854)の埋葬が始まりだが、もともとこの地は山背泊茶毘所であった。その後多くの外国人が埋葬され明治３年(1870)に正式に外国人墓地に指定された。

・**ロシア正教墓地**－ロシア人墓地と呼ばれるが日本人も埋葬されている。開始時期は不明だが、一番古い墓は1859年(安政6)である。

・**中国人墓地**－中華義塚・中華山荘が正しい。明治９年(1876)清国人墳墓地として開拓使が貸与したのに始まるがそれ以前から中国人の墓地であった。明治10年(明治3年 1877)中華義塚碑が建てられた。

台町遊廓－明治６年(1873)台町・駒止町・天神町に貸座敷営業が公許され台町遊廓と呼ばれた。西部の端であったため妓楼は当初から十一・二軒に終始し、客筋は主として船乗りや漁夫などであった。明治11年(1878)女紅支場が開設された。明治40年(1907)の大火後蓬莱町遊廓とともに大森町に移った。

咬菜園－安政４年(1857)堺新三郎が箱館奉行から官地千百四十余坪の払い下げを受け、庵を造り各地の名花名木を移植し奇石を配した名園で、武田斐三郎が咬菜園と命名した。幕末から明治中期にかけ箱館第一の名園として親しまれた。

段丘の下

弁天砲台－辨天岬御臺場として安政３年(1856)起工した。元治元年(1864)完成とされるが土木工事終了だけで、砲の試し撃ちは慶応２年(1866)である。砲は箱館戦争でも７～９門が配置されただけであった。

税関－安政５年(1858)翌年の貿易開港を控え外国貿易だけを取り扱う運上所として沖之口役所から分離し御作事場内に設置された。明治５年(1871)に完成した埋立地に新庁舎を建て、明治６年(1872)全国より半年遅れて函館税関と改称した。

埠頭－明治４年(1871)この地以外の乗船下船が禁止され、明治５年(1872)に乗下船の小橋が築設された。沖合の連絡船まで小蒸気船や艀に乗っていった。

御庫－義倉は基坂西側、高田屋拝借地跡、明治４年高砂通と移された。明治６年(1873)焼失した豊川遊廓跡に常備倉として６年に２棟、７年に２棟を茂辺地煉瓦製造所の煉瓦を使って建てた。

市杵島神社－弁天社は安政３年(1856)弁天岬台場の築造工事で社地を召上げられ、台場完成後の元治元年(1864)台場の濠に沿う現在の社地が与えられ移転した。明治４年(1871)市杵島神社と改称した。

豊川稲荷社－文久２年(1862)それまで内地通いの船に祀られていた豊川稲荷を勧請したと伝えられる。豊川遊廓の守護神として信仰を集めた。

豊川遊廓－元治元年(1864)山之上町遊女屋が新築島に土地を購入し出張や店を出し、慶応２年(1866)遊廓地となり豊川遊廓、島の廓、築島遊廓と呼ばれた。明治６年(1873)貸座敷営業地として公許された直後に大火で焼失、武蔵野楼だけが残った。火災後開拓使は稼業の現地再開を許さず蓬莱町へ移転させた。

蓬莱町遊廓－元治元年(1864)山之上町遊廓が築島出店の願出をした時、築島を外国人居留地にしたい官が換地として整備した地で、明治４年(1871)山之上町遊廓を移転させ蓬莱町と名付けた。明治６年(1873)貸座敷営業が公許され豊川遊廓も移転した。明治８年(1875)火災で多くの貸座敷が焼失したが復興、繁盛したが、明治40年(1907)焼失、大森町に移った。

地蔵町埋立地－安政４年(1857)から元治元年(1864)にかけて築島に続く地蔵町海岸が埋立てられ、官も外国人居留地造成の埋立を行った。埋立地は古築島(以前の築島)に新築島を加えて三島六橋と呼ばれた。

外国人居留地－

・**大町外国人居留地**－外国人を攘夷から守るため、居留地は埋立地とすることにし、安政６年(1859)大町海岸に着工、万延元年(1860)竣工した。翌年埋立地のうち道路や運上所倉庫を除いて十区画に分け貸渡したが、あまりにも狭いため外国人は居住地から離れず当初は外国人らの倉庫地となった。

・**地蔵町外国人居留地**－大町居留地の不満から文久３年(1863)島野市郎治の埋立地、元治元年(1864)松川弁之助らの埋立地を上知、さらに官費でも埋立てて波止場をもつ地蔵町外国人居留地とした。

Ⅲ 西部地区の街の形成過程による特徴的な景観と観光

箱館の街は海に近い場所から始まった。人々は漁業や商業活動に便利で物資の輸送にも都合のよい段丘下に住居を構えた。箱館山山麓は一部を畑に使ったものの、多くは野草を摘み、生活に必要な木々を伐採するなどの生活の糧を得る場所であり、山に祀った社や仏の山巡りをする地であって、そこを生活の場にすることはなかった。人々の生活は漁業や商業が中心であり段丘上は日常生活とは直接の関係はなかった。

室町期には、河野氏が見晴らしが良く見通しが利いて防備に都合のよい段丘上に館(河野館・宇須岸館)を構え生活した。ただし、これも住民とは直接の関係がなかったことは、館が落ちた後もその地に亀田番所が移るまで、館跡周辺を含め段丘上の多くが曠野のままであったことから伺うことができる。段丘上と下とは生活を異にしていた。

しかし、段丘上は斜面ながら広い土地である。江戸期になると、たびたびの亀田川の出水によって大きな被害を受けた亀田の寺々が、当時は官(松前藩、その後は幕府、箱館奉行)が所有していたこの地に移ってきた。ここは広い土地を占める寺院を建てるには十分であり、また、大きな寺が万一焼けたとき周辺住民に被害を及ぼさないためにもよい土地であった。さらになによりも、すでに多くの人々が箱館に住んでおり、寺を維持していくための檀家として成り立つ収入のある家々があったことも、箱館に移転する大きな理由となったのであろう。こうして寺々を通して段丘上は、段丘下で生活する住民と繋がりを持つようになった。

さらに寛保元年(1741)に亀田番所が河野館の跡に移ると、段丘上の新しい住人や山巡りや寺社参りの人々を客として茶屋や遊楽施設が集まり山之上町と呼ばれる街ができ、さらに新地がその先に開かれていった。

寛政11年(1799)幕府の蝦夷地直轄期になると箱館は政治上の重要性が高まり経済的にも発展した。段丘上には引き続き幕府の御役所や各藩の陣屋が建てられ、西側には弁天町からあふれた人々の家も増える一方、段丘下の住民も増え続け、さらに「弁天の衆、大町の旦那、内濶の奴、地蔵のてい(低？弟？)」と呼ばれたように、住む町の特色も表れてきた。それでも基本的な段丘を境とする上下の街の様子は変わらなかった。

その関係が大きく変化したのが開港による外国人の居住であった。

港や商業に携わる外国人は海岸近くの土地を求め、外交や海運業に係わる外国人や各国の領事館は、港への船の出入りを目で確かめるため見通しのよい土地を要求し、外交とつながりをもつ教会も広い土地を求めた。幕府は日本人と外国人を分けて住まわせる方針であったため、箱館でも、来航した外国人たちを港近くの一か所にまとめようと考えた。しかし箱館では居住しやすい場所はすでに従来からの住民によって住みつくされていて外国人居留地にできる土地はなかった。

役人は外国人商人のために急遽大町に埋立地を造成したが彼らを納得させるものでなかったため、さらに箱館商人たちによって造成されていた埋立地を居留地としたが、すでに住民の中に住み着いていた外国人はそこを離れようとしなかった。こうして一般住民の中にある外国人の建物は箱館の風景のひとつとなった。

また、住民近くで広い土地を求めた教会も標高の高い土地しか手にいれることはできず、見通しのよい土地を求めた領事館などの外国施設とともに教会も、段丘上の以前からの寺社と同じ高さかさらに高い場所に建てられることとなり、日本と外国の宗教施設が混じり合う風景となっていった。

このようにして、箱館(函館)は港から街を見上げると、埋立地に洋館や商業地、海岸近くの平地には住民たちの生活地、その上の山の麓に寺や役所、さらにその上に外国の領事館や教会、洋館と、見た目にも異なる建物が階段状に並ぶ景観ができあがった。

函館の街の形成は多くの大火の結果だとよく言われる。しかし、もともとの箱館の街は函館山の麓に広がる段丘を利用して下から上へ順にかたちづくられてきたものである。現在の函館はその後に起きた大火からの復興や人口増による高台への住宅の広がりにより、その形状はうすれてはいるがそれでも段丘によって街が形成されていった基本的な姿は伺うことができる。

現在の函館は、そのような街のでき方と、その後の経済発展から取り残されたため集中して残る古い建物の街並みとが一体となって、“異国情緒ただよう町”と観光客を呼び込んでいる。

段丘によってできた街の形成が、函館の観光に大きく影響している、といえるであろう。　(了)

「箱館から函館へ」明治九年図による
明治初年（明治5年～1875～1877年頃）の函館
「箱館から函館へ」（『郷土』）の「明治九年（1876）図」を下記参考文献をもとに一部修復補筆した。
関係図面番号・15・103点
写真 箱館全図 函館 市場 北海道庁函館支庁 明治53 函館
明治十一年函館大火災復興変正図 明治44 函館
明治十二年函館大火災復興変正図 北海道庁 函館
絵図の実測 函館奉行 函館 嘉永3 函館奉行所
住居表示の記録（函館） 昭62 函館
官修墳墓
招魂社
函館裁判所
叶同館
龜國司祭館
仙國教堂
会所学校
官邸
開拓使函館支庁
英国係扱所
松陰学校
函館病院
官邸
咬菜園
外国墓
キリスト教外国人墓地
外国墓
中国人墓地
地蔵堂
外国墓
ロシア正教墓地
神明社
台町遊廓
市杵島神社
弁天砲台
大町外国人居留地
埠頭
税関
地蔵町埋立地
地蔵町外国人居留地
豊川遊廓
豊川稲荷社
御庫
蓬莱町遊廓
船見町
注 当時の町は道筋に沿って町名がつけられ、片町などの複数の町を称き道路両側が同一町であった。従って、町名は道筋に記すのが適当であるが、図では町名を道筋に接せると道路が不明となるため、道路の脇に記した。
縮R 1/4800
原図(昭45-1993) 宮原 平
作図 茂木 治
平成25-2013. 11

令和２年度の主な事業（報告）

１．「友の会通信」・「友の会会報」の発行

(1) 友の会通信　第51号（令和２年12月20日）

(2) 友の会会報　第68号（令和３年３月31日）

２．例会・講座等の開催

(1) 市立函館博物館企画展の見学会　　令和２年10月１日（木）　参加者　11名

テーマ　「津軽海峡北岸の縄文遺跡」

解説者　函館市教育委員会　文化財課長　長谷山　裕一　氏

市立函館博物館　　学芸員　　奥野　　進　　氏

(2) ウポポイと世界遺産登録を目指す縄文遺跡を訪ねる旅

令和２年10月27日（火）～28日（水）　参加者16名

民族共生象徴空間ウポポイ　国立アイヌ博物館　仙台藩白老元陣屋跡と資料館（白老町）

北黄金貝塚（伊達市）　入江、高砂貝塚（洞爺湖町）

(3) 会員発表会

令和３年３月30日（火）　会　場　函館中央図書館大研修室　参加者20名

テーマ　函館西部地区の段丘と街の形成

発表者　市立函館博物館友の会　会員　茂木　治　氏

３．市立函館博物館、関連団体への後援・協力

市立函館博物館の博物館講座等

函館碧血会

現在、次の企業・団体から協賛をいただいております。改めてお礼申し上げます。

・㈱エスイーシー　・金森商船㈱　・㈱五島軒　・五稜郭タワー㈱　・佐藤電気工事㈱
・㈱佐藤公郎建築設計事務所　・（有）三和印刷・（財）相馬報恩会　・道満清水サッシ㈱

（敬称略・50音順）

市立函館博物館友の会会報　No.68　　令和３年３月31日　発　行
発行所　市立函館博物館友の会　　〒040−0053　函館市末広町21−12
印刷所　㈲　三　和　印　刷　　電話 0138(27)3344
電 話 0138(45)0845　　振替口座　函館02650−0−2216